

女性というイメージの誕生

越智 和弘

ジェンダー認識から生まれる疑問

女と男はたしかに解剖学的に異なる肉体構造をもって生まれるが、それとは別に文化が主体となって形成される性差、すなわちジェンダーが、人間の自分が女であり男であるという自覚、またその振る舞いや行動様式を全般にわたって規定しているという考え方は、今日では比較的広く認められるようになってきている。ただ女性というイメージが誕生する過程を探るうえにおいては、ジェンダーに関する一般認識からは見えてこない、いくつかの重要な疑問点を問題にせざるをえなくなる。これが本論が取り上げるテーマである。

まず第一の疑問は、ジェンダーを規定しているのが文化だとして、それでは「女は女らしく」「男は男らしく」し向ける文化的エネルギーを受け止め内面化する側のプロセスは、男女のあいだで同じなのだろうか、というものである。ここで必要となるのは、フロイトに代表される解剖学的決定論とも、すべての性的差異の発生源を社会に見いだそうとするジェンダー至上主義とも異なる、いわばその微妙な中間領域へ目を向ける視点である。

そしてそこからは、とりわけ女性というジェンダー形成がおこなわれる過程において、外部からの視線が命令するイメージが女のなかで自分の姿として内面化されることが、とりわけ注目すべき点として浮上する。その際大いに興味を引かれる点は、女が内面化する外部からの視線の出所とそのメカニズムである。これが第二にとりあげる疑問点となる。そしてこの視線の主体を探る道程は、ジェンダー形成の原点に位置するこうした女性的な行動様式が、個々の文化に限定された枠内で起きるプロセスとしてどこまで共通な普遍性を主張しうるものか考えざるをえなくする。いや、とかく安易に前提とされがちなグローバルな共通性への認識に慎重になり、もしかしたら、われわれが共通認識だと思っ

ているものが、すでに支配文化による普遍的であるとする刷り込みによる結果であり、さらにその言説がまるで自分たちのものであるかのごとく幾世代かにわたり再生産され継承されつづけたなかをわれわれが生きていることに由来するやもしれぬ、という疑いから出発するならば、女に女性的なるイメージを押しつける主体が何であるかを考えることは、たとえそこから導き出される結果がわれわれにとって好ましからざるものであろうとも、支配文化に貫かれたなかで、その残余物のごとき独自の文化的主体をどのように見いだしうるか、という戦いの争点を、さらに先鋭に浮かびあがらせる意味をもつ。そしてこの戦いに挑むためには、いたずらにすでに異化が進んでしまったわれわれの文化を再発見しようなどと試みても始まらない。われわれが当たり前だと思い込んでいる認識の中に、西洋という支配文化のもつエネルギーがすでに奥深く浸透してしまっている以上、とるべき戦略は、支配文化の迷宮に入り込み、その性格を特異なものとして意識化する作業をとおり、支配文化の編み目からはみ出る独自性を掘りあげていく方法しかありえない。こうした意味から、西洋文化のなかで女性のイメージがそもそもいかに生みだされ継承されてきたのかを、詳細に分析することは不可欠なステップとなってくるのである。

こうした女性のイメージが誕生する過程を解明する作業を経た後に浮上する第三の疑問点は、支配文化の特異なプロセスによって創造される女性のイメージは、はたしてほんとうにジェンダーと呼びうるものなのだろうか、というものである。つまり、そもそも「女は女らしく」「男は男らしく」あるべく規定するのがジェンダーだとすれば、西洋という支配文化が創造し、たしかにグローバルな覇権力をもって広めている女性のイメージは、女と男の社会的役割を差異化する方向で作用しているというよりは、一方ではセックスを中心に据えたフーコーのいう快楽言説の限らない増殖を命じておきながら、他方では誰であろうといまや世界的な規模で活動する交換経済の価値体系に効率よく組み込むため、むしろジェンダーを消滅させ均一化した人間像を強制する巨大な力が働く世界にわれわれは生きているのではないか、という疑いがでてくる。こうなると、進歩的人間なら誰もが突き崩すべき差別ととらえてきたジェンダー間の相違、そしてそれによって当然のごとく目指された男女の区別なき社会参加もまた、じつは西洋文化にすでに周到にプログラムされていた平等幻想に則った均一化路線に巧みに加担させられた結果ではないか、という新たな疑いが生じてくる。



Cindy Sherman, *Untitled Film Still #2* (1978)

観察者のイメージを内面化する女性

ジョン・バージャー¹⁾は、フロイトの「解剖学は宿命である」²⁾とする立場とは異なる角度から、これまた男女の本来的な違いと社会的な作用の接点に位置するかに見える微妙な性格を抽出している。女性というイメージが誕生する過程を探るうえで、バージャーの主張がわれわれの関心をひくのは、彼のいう女の「社会的存在 (the social presence)」³⁾ というものが、男とはまったく逆方向のエネルギーをもつものとして提示されている点においてである。この「社会的存在」には、たしかにフロイトの男根言説にみられるような生物学的根拠はなく、たとえば「女に生まれることは、男に保有され保護され扶養されるよう割り当てられ封じ込まれた空間のなかに生まれることであった」⁴⁾ とする規定によっても示されるように、古来より付与されてきた男女の社会的役割の違いのなかに、「社会的存在」の起因を見いだしている点で、ジェンダーの範疇に組み入れてしまえそうでもある。しかしそれはまた同時に、「女の社会的存在はきわめて本来的で内在的であるため、男たちはそれを、ある種の熱気や匂い、あるいはオーラに似た体からの発散物であるかのごとく受けとめる」⁵⁾ と

説明されるように、時代や地域、あるいはそこに暮らす集団に条件づけられた文化的慣習がジェンダーを規定し強制する以前の、いわば原初的段階における心的刷り込みを問題にしている点で、一般のジェンダー認識からは漏れる可能性もある。

バージャーによれば、男の社会的存在は、男が外部に示しうる自己の能力の有望性に依存している。つまり、その能力が道徳的、肉体的、感情的、経済的、性的といったいかなる性格のものであれ、とにかくその能力が大きく確かなものであれば、それだけ男の存在は目立つものとなり、逆に弱く不確かであれば、その存在感は薄いとされてしまう。要するに男の場合、その社会的存在は、つねに外部にあるものに対し、または外部にあるもののために、自分が何を為しうるかを通してのみ確立される。

これにたいし女の社会的存在は自分自身を観察評価する視線によって規定されている、というのがバージャーの見方である。男の社会的存在が、外の世界にどういった作用をおよぼしうるかによって規定されるのにたいし、女の社会的存在は、自分にたいし何かなされうるか、あるいはなされえないかを、自分の内面において意識化する過程を通してかたちづけられるというのである。したがってバージャーは、「女はつねに自分を注視していなければならない。女はほとんどいつの場合でも、彼女自身のイメージにつきまとわれている。部屋を横切っているあいだも、父親の死に際して涙しているあいだも、女は歩いている自分、泣いている自分を観察者の目で直視しないではいられない」⁶⁾と述べ、女にとってこれが自分自身だという感覚は、幼児期のきわめて早い段階から他人が評価してくれる自分のイメージに取って代わられてしまっている、としている。これは、女が一方では世の中を見る存在でありながら、同時に他方では絶えず他者の視線を内面化し自分自身を観察している、つまり女の自我がつねに二つに分裂していることを意味するのだが、その際外から視線を送っている主体が男であることは、バージャーの指摘を待つまでもなく明白であろう。

したがって女は、男の抱く女性のイメージを内面化し、男の視線を通し自分を観察することで自己の社会的存在を確立していることになるのだが、この見方が正しいとすれば、つぎに二つの重要な問題が浮上する。一つは、女性のイメージが男によって創造されたものであるとすれば、その男性的メカニズムが西洋文化においてどのように生みだされるのかを確認しておく必要がある。そして二つ目の問題はわれわれにとって深刻な意味をもつものであるため、安易

な結論を出しうるものではないのだが、それは、そもそも男性的視線が女に女性的イメージを強制しているのだとすれば、文化を越えた関係においてそれはどう作用しているのか、ということである。男性的視線が女性のあるべき姿を強要するメカニズムをそのまま個々の文化に適用するならば、ある文化内に暮らす女たちはその文化内の男の視線を内面化しているということになるが、実態はそう単純ではないように思われる。現実には支配文化に属する男の視線がグローバルなスケールで波及している可能性がある。いや、そもそもこうした男性的視線のもつ性格自体が西洋文化に独特なものなのかもしれないことを疑って掛かる必要がある。そしてわれわれがいずれ探りださねばならない問題は、こうした西洋支配文化の男性的視線は、たとえば日本の男たちの視線を飛び越えて、日本の女たちに彼女らが内面化すべきイメージをどの程度まで植えつけているのだろうか、というものである。

去勢とフェティシズムから生まれる女性のイメージ

女性のイメージを誕生させるうえで前提となるメカニズム、すなわち女の性的な存在をまず最初に完璧に否認してしまう構造は、フロイトが去勢とフェティシズムの関連性を解明する遙か以前から、西洋文化内においてはすでに機能していたと考えるべきである。それはおそらくキリスト教的な性の抑圧制度が浸透するはるか以前、あの原始母権制から父権制への大きな一歩が踏み出された時期、つまり西洋人が「精神（Geist）」という男性的な「武器」に目覚め、その運用と効果への自信をしだいに蓄積し、やがて永遠ともいえるほど長かった自然＝母性にひれ伏さざるをえない時代からの決別を果たしえた時点から、すでに始まっていたのかもしれない。⁷⁾ とにかくはっきりしていることは、ひとたび精神の力で自然を支配する決意を固めた西洋の男たちは、かつて自然との一体性を主張しえたがゆえに女性が圧倒的な権威と価値を掌握していた時代に二度と逆戻りしない方策として、リビドー供給の源であるがため、つねに精神を機能不全に陥れる危険性を保持する女性器から、エロティックな本質の在処としての意味を奪い、かわりにそこに「去勢＝欠如」という決定的な負の烙印を押すことで、これを永遠に封印してしまったことである。

では本来在ったであろう女性を去勢という非具現化の彼方に追い込み、かわりに男が安心して楽しめる欲望喚起装置としての女性のイメージのみを創造するメカニズムとは、そもそもどのように機能するのだろうか。それは、女性的性

質のなかから、男からみた計り知れない面、危険で脅威となりうる面、死を思わす汚れて臭気を発する面、度を越した快樂といった、いわゆる秩序を脅かす

おぞましさを、だけをそぎ落としたエロティシズム、とも言い換えうるものだが、その仕組みを解くためには、やはりフロイトが「女性に性的な対象となりうる特徴を与える」⁸⁾ 源泉をなすものと規定したフェティシズムの内容に立ち入る必要がある。

フロイトは、あらゆるフェティシズムの対象は「ペニスの代理物 (penis-substitute)」だとした。しかしそこで代理されるペニスは任意の男に備わるペニスではない。それは「幼児期に重要な意味をもっていたが、その後失われた特定のペニス、特別な意味をもつペニス」のこと、つまり具体的には、「女(すなわち母親)のペニス」のことなのである。⁹⁾ ここには、西洋文化において女の性的な魅力とはなにかを命令し、そのイメージを創りだしてきた男の視線を操る空想や妄想の核心に、去勢を前提とするがゆえに存在するはずのない女のペニスを探し求めるといふ、明らかに矛盾した衝動が決定的な要因として作用していることが示されている。

だが、そもそも女に備わっているはずのないペニスを追い求めるフェティシズムという衝動¹⁰⁾ が、女を性的な対象とみなすエロティシズムの発生源となっているというのは、どういうことなのか。まずは、ここで用いられる「衝動」という言葉が、そもそも動物の性的本能とヒトの性的な動態とを区別する意味でフロイトが規定した用語であることを理解しておく必要がある。そこで――これが文化を越えた普遍性を主張しうるものであるか否かは当面さておいて――われわれがとりあえず把握しておくべき点は、そもそも女を性的な対象として視線でとらえる際に性的欲望を誘引するメカニズムが、ヒトの場合すでに成長の初期の段階において、動物にみられるような生殖のみを目的とした本能的性欲からは完全に逸脱したもの、すなわち本来的に「多形倒錯 (Polymorph perverse Anlage)¹¹⁾」の性格を帯びていることである。

子供は、母親にはペニスがない(去勢されている)ことを目の当たりにしても、その事実を受け容れたくない願望から、去勢の事実の確認とその拒絶というコンプレックス(=心理的複合体)¹²⁾ を生みだす。こうして人は、最初から無いことはわかっていながら母親にもペニスがあるはずだという願望を諦め切れず、それが決定的に失われるのを防ぐために、つぎつぎにフェティシズムの対象をみいだし、それに長く執着するといふのである。フェティシズムの対

象についてフロイトは、「足や靴が（あるいはその一部が）フェティシズムの対象として選ばれることが多いのは、少年の好奇心が、下から、つまり足の方から女性の性器の方を窺うからである。以前から考えられているように、毛皮やビロードは、性器の場所を覆っている陰毛をみた時の印象を定着させるのである。そこには、少年がみたいと願っていた女性のペニスが生えているはずだった。またフェティシズムの対象として選ばれることの多い下着類は、脱衣の瞬間、すなわちまだ女性にペニスがあると信じていられた最後の瞬間を固定するものである」¹³⁾と説明している。

ボードリヤールはこの視点をさらにすすめ、太ももをしめつけるストッキングの線にみられるような女の肉体を区切る下着類や装身具の境界線が生みだすエロティシズムは、それが単に女の性器に近いことからくるのではなく、そうした線で区切られた肉体が、男が抱く女性性器に対する不安＝去勢恐怖を新たな去勢の演出によって無害化し忘れさせる機能をはたしているからだ、と説明する。¹⁴⁾「ぽっかりと口を開けた穴の強迫観念が、逆に男根の魅力に変質する。否定され、線で区切られたこの神秘あふれる虚無の裂け目からは、ありとあらゆるフェティッシュなものがとびだしてくるのだ」¹⁵⁾

男が創りだすフェティッシュなイメージで覆われた女の肉体は、もはや去勢恐怖がもたらす欠如や不可解なもの、深淵や不吉な兆しといった女性が本来的にもつ不安要素を消し去られ、男が安心して鑑賞し操作できる断片化された肉体、すなわち「セックスの男根的な記号表現にまで昇格させられた部分」¹⁶⁾と化すことで、男の性的充足に奉仕する度合いに応じ区分けされ、さまざまな象徴的価値を付与されることで母性的男根の代用品として資本主義経済ヒエラルキーに組み込まれていくことになる。

西洋の男たちは、こうしてかつて母がもっていた快樂を与える力の代わりになるものを、本来在るはずの女性とは別の場に求め、そのイメージを永遠に創造しつづける宿命を負うことになった。それは、まさに初めから絶対的な矛盾があることを承知したうえでの手続きである。だからこそかれらは「女の肉体を覆う何重ものヴェールの奥には、全くなにもありはしない、いや、なにもあったためしなどないのだ」¹⁷⁾とは十分に知りつつも、去勢された場所にきっとあったはずの欲望の源泉に代わる男根の存在証明をつぎつぎと生みだし、こうして新たに創造された女性のイメージを、負の刻印を押した女の肉体にむりやり押しつける行為をやめられない。そしてそのすぐあとには、そうしたイメ

ージが虚像であること自分自身が最もよく知っているがために、ちょうどストリッパーが悩ましげに衣服を一枚一枚脱いでいく行為にじっと目を凝らすように、その奥に必ずや在るはずだと願う 真実＝リビドーの供給源としての母の男根 をみつきたい一心で、自分たちが創りだしたフェティッシュな存在証明をひとつずつしりぞけていくのである。母が体現していた最大の至福を、性的快樂以外の場で実現しなければならない宿命を帯びた西洋の男たちは、こうして秩序を構築する代償として自らの手で否認した女性的快樂に代わるもの、すなわちフェティッシュな女性のイメージをこの世に限りなく生みだすことになったのである。

フロイトのいう去勢をめぐる言説の創造と、その必然的帰結としてのフェティッシュなものの飽くなき追求が生みだす交換価値を付与された象徴のエンドレスな美・魅力あるものの量産という、われわれの世界を構成するかにみえる二段構えの文化的メカニズムが、精神分析が一般に前提としがちなように、ヒトの成長過程に共通した文化を横断するグローバルな有効性を主張しえるものかどうかについては、今後大いに検討されるべき価値がある。つまり、こうした去勢言説の創造からフェティシズムに向かう女性のイメージをめぐる構造、すなわち去勢というかたちで、まずはエロティックな本質をみずからの手でうち消しておきながら、つぎに非存在の烙印を押した本質への憧憬を限りなくかき立てることでその代用物をこの世に生みだしつづけるという、いわば無い物ねだりの構造をもつこの奇妙なメカニズムは、文化を越えてグローバルに普遍的であるというよりは、むしろ西洋文化に限られた特性であって、この特異な仕掛けを創造しえたことこそが、地球上で唯一西洋文化だけに、とりわけ近代以降、他のすべての文化を圧倒しうる霸権的エネルギーを付与したのではないか、という大いなる疑問が浮上してくるのである。

投射する視線が命じる女性のイメージ

以上から西洋的な男たちは、もはや一義的に自己や種の保存を目的として女に対し性欲を覚えるのではないことが判明した。母親にペニスが無いことの確認とその事実の拒絶という、そもそも生殖とはまったく関係のない相反する二つの心的状況、つまりまさに「矛盾したものを分裂したままで結びつける」¹⁸⁾がゆえに長い持続性をもつとフロイトが述べる「挫折した欲望」¹⁹⁾こそが、女性的なイメージを創造し、それを女に「女らしさ」を命令する根元的な力と

して作用しているのである。

それではこのような男性的視線とは、どのように機能しているのだろうか。アメリア・ジョーンズは、女にフェティッシュなイメージを押しつける男の視線を、「投射する視線 (the projective eye)」と言いあらわし、つぎのように説明している。「投射する視線は、暴力的で強い浸透力をもつものと理解される。その投射は意図的におこなわれ、視線は獲物を万力でつかむように捕獲する。情け容赦のない権力陣営に自由を奪われ、せいぜい哀れな斑点としかみなされないペニスをもたない性にたいし、それは単純でしかも効果的な武器として作用する」²⁰⁾

ここでいわれる「投射する視線」とは、ちょうど映写機が実際とはまったく別の像をある人物のうえに重ねて投射するのに似たかたちで、男が空想や妄想のなかで創造した女性らしきイメージ、すなわちこれまでみてきた、去勢された母の「ペニスの代用物」としてのフェティッシュなイメージを、「ペニスをもたない性」である女の自我に焼きつけるはたらきをする男根的視線のことである。たしかにわれわれは、男の想像力によって言説化された女のイメージだけが、ボードリヤールの的に表現すれば、象徴としての交換価値を認められる資本主義経済のなかで生きている。要するに「女性的なるものは、男という主体が考案したモデルと法秩序のなかにおいてのみ出現しうる。このことは、性は本当のところ二つあるのではなく、一つしかないことを意味している」²¹⁾と言いきるリュース・イリガライの言葉に示されるように、男によって言説化されたイメージ以外の女性は、少なくとも西洋文化内においてはどこにも存在しないのが現状である。いや、真の女性のまえには、いわば幾重にもわたるカーテンがおりており、それをスクリーンに、ありとあらゆる男が創りだすフェティッシュなイメージ(=女のあるべき姿)が投射され、それがあどけない可愛らしさであったり、男に負けず颯爽と働くキャリアー・ウーマンであったり、あるいは肉感的なセックスアピールであったりと、さまざまな姿をとるなかで価値体系に組み込まれ、誰もがそれを「女らしさ」だと錯覚してしまっているのが現実だとも言いえよう。

こうしたなか、女の側における自我の形成もまた、スクリーンに映しだされた自分の姿、つまりフェティッシュな男根的視線が強要するイメージを通してしか可能ではないことは、冒頭のバージャーによる、女は男の視線を内面化し、そのイメージを自己のアイデンティティとして認識するという指摘によっても

裏付けられるし、それはまた、こうした男の視線が命じるあるべき姿を自分のものとして装うことによって始めて、女は男から見て性的な魅力を発散する対象となりうるとするボードリヤールのつぎのことばによっても明白になる。

「女性、まず自分自身を楽しみ、自分自身に満足し、みずからの姿以外の欲望も、超越性ももたない存在となることを受け入れないかぎり、決して完全に自分自身にはなれないし、したがって魅力的にもなれない——性にかんする全システムが完結するために望まれるのは、まさにこのことなのである」²²⁾

ジェンダーの消滅した均一社会

ボードリヤールのいう「性にかんする全システム」が、男根的視線が生みだすフェティッシュなイメージで覆い尽くされた今日の西洋世界を意味していることは当然として、問題となるのは、近代以降一貫してグローバルな覇権を主張しつづけてきたこの支配文化が内包する男根的視線によって、われわれの文化ははたしてどの程度まで貫かれているのか、という点である。この問いへの答えを見いだすことは、そう簡単なことではないが、それでも支配文化圏内においてはうへのイリガライの指摘にもみられたように、すでに「性は本当のところ二つあるのではなく、一つしかない」ことが明白である以上、西洋において消されてしまった女の側の性が、われわれの文化のなかでは、どの程度まで今なお存続しているのかを探ることは一つの糸口になるように思える。

だがとりあえずはその前に、ジェンダー認識への疑問点から出発し、女性というイメージを誕生させる西洋独特のメカニズムを考察してきた本論を締めくくる作業として、いまいちどジェンダーに立ち戻り、元来は「女らしさ」「男らしさ」を表現するものとしてあるはずのジェンダーが、西洋文化内において今日どういう状況にあるのかを考えることで、とかく当たり前とされがちな価値観への問題提起としておきたい。

今日ある男女のイメージはセックスに還元されてしまっており、それは本来あったはずのジェンダーとはまったく無縁のものと化している、という論を展開したのはイヴァン・イリイチであった。彼の代表的著作『ジェンダー』（1982年）は、とかく反フェミニズム的論調に終始しているということで批判のやり玉に挙げられがちだが、その主張を貫く、西洋近代を特徴づける個人主義とエゴの平等主義に支えられた資本主義経済こそがジェンダーの喪失を促し²³⁾、まさにジェンダーがセックスへと矮小化され還元されてしまったことこそが、現代というわれわれの生きる時代を他のいかなる時代とも明白に区別する特徴なのだ²⁴⁾、と位置づけた点は傾聴に値する。

イリイチのこうした洞察は、欲望が最大に満たされる女性的（＝母性的）快楽への退路をみずからの手で断った西洋の男たちが、それによってエロティックな美への渴望を放棄したわけではけっしてなく、エロティックな本質の復活を封じながらも同時にそのフェティッシュな代用物を、男根的な精神が構築する秩序と共存しうる新たなイメージ、すなわち女性的魅力として経済の価値体系のなかに交換可能な象徴として組み入れてきた過程を、ジェンダーの喪失過

程として言い換えたものであるといえる。イリイチのこうした観点はまた、制御しがたいものであるがゆえに、近代的な社会秩序を構築するうえで最も恐れ忌み嫌うべき脅威とみなされた性的快楽を、過度に封じ込めようとしたことが、かえって人々のあいだに性への想念をかき立てることになり、さらには医学を先頭とする性の特権的な担い手により性をめぐる言説の爆発を引き起こすことになったとする、フーコーが描き出す快楽の装置²⁵⁾が、じつは「経済を媒介とするセックスの体制」²⁶⁾の出現を意味していたことを言い当てたものともいえよう。

さらにイリイチの主張がもつ真の威力は、西洋に由来する基本的価値観としてわれわれのなかにいわば当然のごとく刷り込まれてきた平等主義そのものを真っ向から問題視している点にある。とりわけ画期的なのは、フェミニストが目指す性的役割の強制からの解放も、人類は誰もが人間として平等であるという考えも、どのような職業に就いているものも平等に尊敬に値するはずだという教えも、じつは抑圧構造から勝ち取られる平等へ向けての歴史として記述されるべきものではなく、ちょうど性に関して抑圧から解放へのプロセスだとみなされてきた道程が、じつは性の言説が限りなく拡散し増殖すべくプログラムされた快楽の装置の構築過程に組み込まれた現象に過ぎなかったこと暴いてみせたフーコーの説に似て、ジェンダーを消滅させ男女の区別なしに均一化された労働力として吸収することを、構造的な宿命として最初から内包していた西洋近代の経済システムが、その体制を構築し維持していくために、人々に信じ込ませねばならなかった幻想であることを暴いてみせたことにあるといえよう。

イリイチの提起する問題性は、その著作が発表されて20年ほどを経たいま、ますます差し迫った深刻さを増していることに疑いの余地はない。だとすれば、われわれにできることは何か。彼は、「金銭的関連から漸進的にプラグを抜くことを基礎とするような生活の自立・自存が、今日を生き延びるための条件であるように思われる。ネガティブな成長へと転じない限り、生態系のバランスを維持することも、地域間の公正を達することも、あるいはまた地域の民衆の平和を育てることも、不可能である」²⁷⁾と述べ、セックスが支配する産業化された今日の経済体制から、ヴァナキュラーな(=その時代や土地・集団に固有の)ジェンダーの支配する社会へ回帰する道を提唱する。ただそれが、にわかには実現し難い道であることは周りを見回しただけで明らかであろう。彼が提唱する「商品の生産と商品への依存から後退する」マイナス成長への移行は、

まず何よりもフーコーのことは借りれば、近代的人間を「婚姻の装置」から「快楽の装置」へと転換させる原動力として今なお加速しつづける個人の欲望とエゴをどう減速させさらに制御しうるか、という問題の解決を前提とするからである。

ただイリイチのいうことなど現実には実現不可能だなどと言っているうちに、女でなければできない、男でなければできないジェンダーに規定された仕事はこの世からますます姿を消し、それが当然で良いことであるとする流れに疑問や異論を差し挟む余地がないまま、すべてを男根的価値観に基づいた交換経済へと組み込む均一化のプロセスは、いまやグローバルなスケールで浸透しつつある。最大の問題は、これが真の意味ではけっして男女の平等化とは呼べないものであることである。なぜなら、そもそもこうした世界を生みだしたのが男性、すなわちあくまでも一方の性であって、もうひとつの性は、押しつけられるイメージを自分と思い込むなかで、自己のジェンダーを捨て、男性の構築した枠組みとルールに従うことを前提に社会に参加させてもらっているのが現状だからである。

注

- 1) John Burger, *Ways of Seeing* (London: Penguin Books Ltd, 1972), pp.45-47.
- 2) Sigmund Freud, 'The Passing of the Oedipus-Complex', in his *Sexuality and the Psychology of Love* (New York: Touchstone, 1997), p.170.
- 3) Burger, *Ways of Seeing*, p.45. バージャーはジェンダーという言葉をもちいていない。たしかにイヴァン・イリイチの『ジェンダー』が発表されたのが 1982 年であったことを考慮すれば、バージャースが本書を認めた時期には、「ジェンダー」という語はまだ一般に定着していなかったと考えられる。ただバージャースがもちいた「社会的存在(the social presence)」が、はたしてジェンダーとどの程度の同義性を認めうるのかについては注意深くあつかう必要がある。
- 4) *ibid.*, p.46.
- 5) *ibid.*, p.46.
- 6) *ibid.*, p.46.
- 7) 越智和弘「おぞましき女体・文化 ― 女性によるセクシュアリティの表象をめぐる多元文化論の試み ― クリスタ・バインシュタイン ― 原始母権制と供犠への

憧憬」(『武蔵野美術 Nr.111』武蔵野美術大学出版編集室、1999年1月)。

- 8) Sigmund Freud, 'Fetishism', in his *Sexuality and the Psychology of Love*, p.206.
- 9) *ibid.*, p.205.
- 10) 岸田秀は、フロイトにおける 本能 と 衝動 の区別を重視し、動物一般に備わる「自己保存または種族保存に役立つところの遺伝的に規定された行動形式」である本能にたいし、人間にしか備わらないものとして「過去の状態の再現を求める」行動形式としての衝動を 欲望 と言い換え、こうした人間の性欲がそもそも種の再生産を目的としておらず、いちど挫折した過去の状態の再現を求める性格をもつものであることを明示した。「本能的行動形式を失ってしまったとき、人間の本能は欲望に変質したのである。自己保存本能はナルチシズムに変質し、性本能はエロティシズムに変質したのである」岸田秀『ものぐさ精神分析』(青土社、1992年) pp.133-135.
- 11) Sigmund Freud, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie* (Fischer: Frankfurt am Main 1991), p.93.
- 12) 当然のことながら、「コンプレックス」というとわが国では一般的に、「劣等感コンプレックス」を指してしまう場合が多いのに対し、そもそも「コンプレックス」はフロイトが使いはじめた用語であり、それは「エディプス・コンプレックス」の概念に代表されるように、心理要素のもつれ、錯綜、葛藤などからなる「心理的複合体」を意味することは、小此木啓吾の指摘にもあるとおりである。小此木啓吾『日本人の阿閼世コンプレックス』(中公文庫、1992年) p.20.
- 13) Sigmund Freud, 'Fetishism', p.207.
- 14) Jean Baudrillard, *Symbolic Exchange and Death* (Sage Publications: London 1993), pp.101-102.
- 15) *ibid.*, p.110.
- 16) *ibid.*, p.101.
- 17) *ibid.*, p.110.
- 18) Sigmund Freud, 'Fetishism', p.209. フロイト「フェティシズム」、前掲書、二九ページ。フロイトはさらに、フェティッシュな対象は、単に「崇拜」あるいは「情愛をもって扱われる」だけでなく、同時に「嫌悪」され「敵視」されるものであることをも喚起している。とくに父親と自分との同一化が強いかたちで達成されたフェティシストが成人し、自分が父親になった場合などは、母親を去勢した(=正しいことをした)のは父親だという刷り込みが強いため、この愛憎関係がことさら強くあらわれる、と指摘している。
- 19) 岸田秀、前掲書、p.135.
- 20) Amelia Jones, 'Tracing the Subject with Cindy Sherman', in her *Cindy Sherman-*

Retrospective (Thames & Hudson: Chicago/Los Angeles 1997), p.34.

- 21) Luce Irigaray, 'Così Fan Tutte', in her *This Sex Which Is Not One* (Cornell University Press: New York 1985), p.86.
- 22) Jean Baudrillard, *Symbolic Exchange and Death*, p.109.
- 23) Ivan Illich, *Gender* (Heyday Books: Berkeley 1982), pp.10-11.
- 24) *ibid.*, p.70.
- 25) Michel Foucault, *The History of Sexuality - An Introduction Vol.I.* (Vintage Books: New York 1978), p.17.
- 26) Ivan Illich, *Gender*, p.20.
- 27) *ibid.*, p.17.

参考文献

- ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』（今村仁司・塚原史訳、筑摩書房、1992年）
 ジョン・バージャー『イメージ』（伊藤俊治訳、PARCO出版、1988年）
 ミシェル・フーコー『性の歴史 I 知への意志』（渡辺守章訳、新潮社、1986年）
 ジークムント・フロイト『エロス論集』（中山 元編訳、筑摩書房、1997年）
 イヴァン・イリイチ『ジェンダー』（玉野井芳郎訳、岩波書店、1998年）
 リュース・イリガライ『ひとつではない女の性』（棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子
 訳、勁草書房、1987年）
 岸田秀『ものぐさ精神分析』（青土社、1992年）
 小此木啓吾『日本人の阿閼世コンプレックス』（中公文庫、1992年）